

今月の

逸品

NO. 59 2022. 6~2022. 7



コッ kop

マンドゥク manduk

グイロ guiro

「コッ kop」 タイ(東南アジア) 全長92 mm、幅66 mm

道端で売られているような素朴な木製音具。タイの夜店でこれを買った時、足元にひとつ落ちていると思ったら本物の蛙だった。つまり、大きさも形状も本物そっくりなのだった。「音を出すための道具=音具」という観点から様々なものを集めてきたが、よく「名称」に悩む。いわゆる「楽器」としては認知されていないので、タイ人に「これは何？」と聞けば、当然、「コッ(蛙)」と答えるのである。

木の塊そのままでは良い音の響きは得にくいので、音具にするために、割れ目(スリット)を入れて内部をくり抜き空洞を作る場合が多い。それを叩くものを「スリットドラム」と呼び、その仲間は世界各地に見られる。アフリカや大洋州などでは丸太をくり抜いて木の桴で叩く多様なログドラムがあるし、日本や中国では木魚がそれにあたる。

しかし、コッの意外性は、蛙の形をした本体をその口にくわえている桴をとって叩くのかと思いきや、何とそれで背中中のギザギザを擦って鳴らす点にある。スリットドラムというよりは、刻み目を擦って鳴らす「スリザサラ」で、ラテン楽器のグイロ guiro (ペルー)等の仲間といえる。

木魚は、不眠不休の修行僧の象徴とされる魚が、スリットの部分に2尾組み合わせられた文様が施されているが、ポクポクというその音は魚のイメージからは程遠い。一方、コッを鳴らして日本の子どもたちに聞かせても、「ケロケロという蛙の鳴き声みたい」と答えるだろう。まさに蛙の鳴き声を模すために蛙の形をした、理にかなった音具と言える。

蛙の鳴き声を模す音具と言えば、インドネシアの「マンドゥク manduk」(2点所蔵)もそうである。本体がカエルの形をしているものもそうでないものもあるが、小さな太鼓の膜面の中央に紐を通し、それを棒の先につけたものである。その棒を持ってダイナミックに振り回すと、棒と紐が擦りあわされた振動が膜に伝わって拡声され、グワグワッと大きな音を立てる。

どちらの音具の音がより蛙らしいか聴き比べてみてください。

「身近な音具たち」 https://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/taka/main_page.html

執筆者：田中 多佳子 (音楽科 教授)

※附属図書館で展示しています。